

2013年度
国
語
(問題)

< H25070018 >

注意事項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～7ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答用紙の受験番号をよく確認すること。
- 4 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。また、解答用紙の他の部分には何も書かないこと。
- 5 氏名は、試験が開始してから、解答用紙の所定欄に正確に正しいに記入すること。
- 6 マーク欄は、はつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムで正しいに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

〔段落1〕 人生に衝撃を与える様な人に出会う、ましてや自分自身に出会う、などという劇的なことは私にはなかった。けれども哲学の業を進める上で^①ヒン繁に出会ったのは、人間が自分自身について抱く錯誤や誤解であった。たとえ「心の中」である。人は何でもやたらに「心の中」に取り込もうとする悪い癖がある様だ。

A

〔段落2〕 事実は、世界其のものが、既に感情的なのである。世界が感情的であって、世界其のものが喜ばしい世界であったり、悲しむべき世界であったりするのである。自分の心の中の感情だと思いついて入っているものは、実はこの世界全体の感情のほんの一つの小さな前景に過ぎない。此のことは、お天気と気分について考えてみればわかるだろう。雲の低く垂れ込めた暗鬱な梅雨の世界は、それ自体として陰鬱なのであり、其の一点景としての私も又陰鬱な気分になる。天高く晴れ渡った秋の世界はそれ自身晴れがましいのであり、其の一点景としての私も又晴れがましい気分になる。

〔段落3〕 簡単に云えば、世界は感情的なのであり、Bなのである。其の天地に地続きの我々人間も又、其の微小な前景として、それに参加する。それが我々が「心の中」にしまい込まれていると思いついて入っている感情に他ならない。此の^②ことを^②エイ敏に理解したのが、山水画、文人画を含む日本画家達であり、又西洋ではフランスの印象派の人々であったと思う。彼等は其の風景の描写にあたって何よりも其の風景の感情を表現するのに努力したからである。又音楽も、三次元空間に鳴り響く世界其のものが、音楽的感動なのであって、我々は其の感動のお相伴を受けているだけなのではあるまいか。

〔段落4〕 此の天然自然の構図を壊して感情を、せせこましい「心の中」に押し込める取り込み癖は、やがて、世界から、思いや、感じの全てを取り込もうとすると共に「心の中」の方も、やがて、「意識」というCに昇格されてきた。此の「意識」こそ、デカルト以来、西洋思想の根底として現代科学の骨の髄まで^③カン通しているものである。そして此の「意識」が、世界と人間との間に立ちほだかる薄膜として世界と人の直接の交流を遮断している元凶だと思われる。最近ではそれに、脳生理学の「知半解が加わって、数ミクロンの「脳細胞」^④が、意識の代役をつとめるといった奇怪至極の現象さえ見られる。此の歪んだ状態から人間本来の素直な構図に戻るのに、難解だけが売り物の哲学や、思わせぶりの宗教談議は無用の長物、ましてや、「自然と一体」などというDに耳を貸す必要はない。実在論というのみかけほどには丈夫なものではなく、丈夫なのは人間の制作した世界物語りのほうなのである。

〔段落5〕 我々は安心して生まれついたままの自分に戻れば良いのだ。其処では、世界と私は地続きに直接に接続し、間を阻むものは何もない。梵我一如、天地人一体、の単純明快さに戻りさえすれば良いのだ。だから人であれば、誰にも出来ることで、ただか一年も多少の練習をしさえすれば良い。

(大森荘蔵「自分と出会う」より)

問一 傍線部①～③のカタカナを漢字に改めるとき、同じ漢字をカタカナの部分に用いるものは、次の1～6の中のどれか。それぞれ一つ選んで解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ① | 1 ヒン度 | 2 ヒン質 | 3 ヒン者 | 4 来ヒン | 5 ヒン死 | 6 ヒン詞 |
| ② | 1 護エイ | 2 題エイ | 3 撮エイ | 4 エイ角 | 5 エイ像 | 6 経エイ |
| ③ | 1 カン門 | 2 習カン | 3 カン容 | 4 カン散 | 5 カン元 | 6 カン徹 |

問二 次の1～4の文を正しい順序にし、空欄 A に入るようにした時、三番目に来るものはどれか。最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- ここに何か恐ろしい物なり人なりがあるとすると、人は早速恐怖の感情を剥がし取って自分の心の中に取り込み、感情とは自分の心の中だけのものだと思ってしまう。
- 事実は、単純明快で、恐ろしいものが目の前に居る、それ以上でもそれ以下でもないのである。
- 第一に、剥ぎ取られた方のもは、もう恐ろしくも何ともない筈だ。
- しかし感情だけを剥ぎ取ったり抽き取ったりすることなど土台出来ることではない。

問三 本文中には、論旨の展開から言って余分な文が一つ挿入してある。その文はどの段落にあるか。その段落を示す記号1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

問四 空欄

B	D
---	---

 のそれぞれに入る語句として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで、解答欄にマークせよ。

- | | | | | |
|------------|-------------|-----------|--------|--------|
| B 1 以心伝心 | 2 天地有情 | 3 則天去私 | 4 森羅万象 | 5 物心一如 |
| C 1 観念的なもの | 2 矛盾に満ちたもの | 3 あいまいなもの | | |
| 4 不可解なもの | 5 もったいらしいもの | | | |
| D 1 抽象的な議論 | 2 金科玉条の言葉 | 3 単純明快な論理 | | |
| 4 出来合いの連呼 | 5 無意味な標語 | | | |

問五 傍線部I「数ミクロンの「脳細胞」が、意識の代役をつとめる」の説明として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 意識のさまざまな姿は、種類の違う単位としての「脳細胞」によって形成されているということ。
- 2 人間の意識は全て数ミクロンの「脳細胞」の働きによって支えられているということ。
- 3 「脳細胞」を科学的に説明すれば、意識のあり方がはっきりと理解出来るということ。
- 4 意識を観察し秩序立てると、全てが「脳細胞」の生理的な構造に帰着するということ。
- 5 数ミクロンの「脳細胞」の複雑な組み合わせによって、人間の意識は初めて確かな姿を持つことになるということ。

問六 本文中の筆者の考えと一致するものを、次の1～6の中から二つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 人間の意識に想起されるのは過去の知覚ではなく、全ての自然の持つ永遠の姿そのものである。
- 2 人は喜怒哀楽の感情を「心の中」にしまい込むが、事態は逆で感情的な要素は世界そのものの中にあると言える。
- 3 脳の働きによって意識が生まれるのであり、人間の心の動きは脳の働きの新しい生理的研究によって刻一刻解明されつつある。
- 4 哲学や宗教を超えた科学的世界像こそ、人間の「心の中」で動くメカニズムを解明する手立てとなるはずである。
- 5 意識というものを人は簡単に考えやすいものだが、それは人と世界を隔てる要因になるものである。
- 6 言葉と世界との間に「意味」があると考えることによって、現実のなまなましさを真に把握する第一歩が形成されるのである。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

〔段落1〕 芭蕉の『おくのほそ道』は名作だが、江戸時代の紀行としては異色作である。ひとつまちがったら名作どころか迷作になったかもしれないと言いたいくらいの異色作であり、作爲にみちて無理をしている不自然な作品である。もちろん、作爲も無理も不自然も、文学作品においては決して悪いことではない。その結果、美しい、人の心を楽しませる魅力にみちた作品が生まれることはいくらでもある。『おくのほそ道』はその点で、きちんと成功している作品だ。

〔段落2〕 問題は、そんな異色作を、江戸時代の紀行の代表作とするところにある。「芭蕉のような作品がない」ことで、この時代の紀行はすべて否定されたが、言いかえればそれは、芭蕉の作品が以後の近世紀行全体に、さほど大きな影響を与えていないことにもなる。それを継承し、追隨する作品群が生まれなかったのは、芭蕉の偉大さではなく、

A でもある。『おくのほそ道』のような作品がないから、江戸時代の紀行は不作で不毛だという話は通用しない。そもそも代表作とは、何らかの共通点を持つ作品が多くあるなかで、最もその特徴をよく生かした最高のものを指す。似た作品がないという時点で、すでにその作品は少なくとも代表作と言われる資格には乏しい。

〔段落3〕 どんな世界でも、B というものはすばらしい、歓迎すべきものだが、それを標準にしてすべてを評価しては、B そのものの価値さえ否定することになる。特に B でなくても、何かすぐれた存在があった時、

それにどれだけ似ているかどうかで価値を決めていたのでは、過去の恋人の面影を断ち切れない男女と同様、新しいものの価値はつかめない。『源氏物語』にひきつづく物語群や西鶴の後の浮世草子の場合も同様であるが、その当時の作者や読者の気持ちを考えながら、その作品にふさわしい新しい基準で読まなければ、なぜその時代にそのような作品が書かれ、読まれ、愛されたのかは、決してわからないだろう。そこへいくと芭蕉のような異色の存在は、時代を超えた価値基準を創造したという意味で、永遠の新鮮さを有しているといえるべきだ。

〔段落4〕 では『おくのほそ道』の、どこがいったい異色作なのだろうか。鳴神克巳は芭蕉の紀行について、

芭蕉はその形こそ新しい俳諧に依つたものであるが、その精神は中世の詩心完成である。故に彼の文藝は中世的なもの完成者であると云はねばならぬ。

と述べ、読みそのものは的確で鋭い。芭蕉の紀行は江戸時代の旅の現実を描きながらも、そこに流れる精神は中世以前の紀行に近い。それは偶然ではなく、芭蕉自身によって、意図的に選びとられた姿勢である。

〔段落5〕 芭蕉よりやや下って江戸時代中期、自身もいくつかの紀行を記した読本作家の上田秋成(一七三四―一八〇九)は、紀行「去年の枝折」(安永九―一七八〇年)の中で、旅先で会った僧の見解として、芭蕉に対して次のような悪口を言っている。わざと変な理屈を使って遊んでいる可能性もあるから、秋成自身の本心ではないかもしれない。だが、たとえそのような「D」であつたとしても、そこには芭蕉の創作姿勢を考える上で、無視できない観点がある。

実や、かの翁といふ者、湖上の茅檐、深川の蕉窓、所さだめず住みなして、西行宗祇の昔をとなへ、檜の木笏竹の杖に世をうかれあるきし人也とや、いとこゝろ得ね。彼の古しへの人々は、保元寿永のみだれ打ちつゞきて、宝祚も今やいづ方に奪ひもて行くらんと思へば、そこと定めて住みつかぬも、ことわり感ぜらる、也。今ひとりも嘉吉応仁に世を生まれあひて、月日も地におち、山川も劫灰とや尺きずなんとおもひまどはんには、何このやどりなるべき、さらに時雨のと観念すべき時世なりけり。八洲の外行浪も風吹きた、ず、四つの民草おのれおのれが業をおさめて、何くか定めて住みつくべきを、僧俗いづれともなき人の、かく事触れて狂ひあるくなん、誠に^①堯年鼓腹のあまりといへ共、G 学ぶまじき人の有様也とぞおもふ。

〔段落6〕 ともすれば忘れられがちだが、紀行や日記は、小説や和歌以上に虚構の世界を意図的に作り上げる文学である。「それは、しなくていい苦勞で、不自然な生き方だ」という秋成がここでしている批判など、芭蕉にとつては覚悟の上だろう。旅などしなないならすみ、したければかなり自由で、苦勞も危険も少なくなった時代に、中世以前の名作と同じ、緊張感と悲壮感の漂う孤独な先の見えない旅を、芭蕉は再現しようとした。生きていくつらさ、旅をする苦しみが名作を生むのなら、それがうすらいだ江戸時代、これまでの紀行の名作に、その点でははじめから勝負はできない。だがというか、だからというか、芭蕉は生活も旅も楽になり自由になった時代にあえて、昔の旅や人生と同じ心理や心境を、そんな現実の中から発見し、拾い集めて構築した。

〔段落7〕 牢獄や戦場の暮らしを明るく描くこともできれば、のどかな町や家庭の暮らしを悲惨に描くこともできる。

限界はあろうが、すぐれた作家なら、全体のトーンを一貫させ持続させて、意図した世界を作り上げることができる。「おくのほそ道」をはじめとする芭蕉紀行の魅力は、世の中が平和になり、地方文化が発展して、旅が娯楽化してゆく時代に、それ以前の古い紀行が基調にしていた、「都をはなれて地方にいく恐怖と悲しみ」「日常を捨てて非日常の毎日を通す不安と緊張」を、そのまま受け継ぎ、再現してみせたことにある。あえて言うなら、それはドン・キホーテが騎士物語にこだわった旅を続け、トム・ソーヤーが奴隷を脱走させるためにわざわざ冒険小説の手順をふみ、黄表紙『江戸生艶気樺焼』の艶二郎が色男の不幸を味わおうと努力するのと共通する、物語の枠にこだわって現実を生きる作業だった。「おくのほそ道」に漂う孤独や悲壮感といった基調は、それ以前の古典的な紀行の伝統であり、意識して守られている分、いっそう純化されている。

〔段落8〕 ことのついでに言えば、現在の高校などの古典教育では、「おくのほそ道」の悲壮感をいたずらに強調せず、楽しい旅の文学として教えることも多いようだ。「江戸時代はこれまで言われてきたような、暗く悲惨な時代ではない」という最近の見直しの傾向に足並みをそろえた指導だろう。江戸時代のイメージを見直すのは大いに賛成だが、「おくのほそ道」に関して言えば、そういう読み方は本来のこの作品の魅力ではなく、芭蕉が作品にこめた思いとも、微妙だが決定的に異なる。そのくらいなら、もっと楽しい旅を描いた、文章もわかりやすい江戸時代の紀行は他にいくらでもある。

〔段落9〕 芭蕉は近世の旅という題材を使って、あこがれの中世の紀行作家たちと限りなく近い旅の世界を作り上げた。それは決して 1 ではないが、維持するために強固な精神力と表現力を必要とする。少なくともそれは、江戸時代の旅の現実をありのままに受け入れて、同時代の人々に旅の実態と魅力とを現実に近いかたちで伝えようとする作品ではない。だからこそ、同時代や後代の作家たちは真似できなかったし、しようもしなかった。貝原益軒にしても本居宣長、橋南谿、小津久足にしても、その他の誰にしても、明確に影響を与えあっている。彼らの著作にはお互いの紀行がしばしば引用され、批評されている。特に『木曾路記』をはじめとした益軒の諸紀行や南谿の『東西遊記』は同時代の紀行のみならず、随筆類にもよく登場する。

〔段落10〕 それにひきかえ、これらの作品の中に、「おくのほそ道」をはじめとした芭蕉の紀行は、松島紀行の類にさえ、いっそさわやかなまでに登場しない。俳人の紀行には山崎北華の『蝶の遊』（延享二（一七四五）年）のように、「おくのほそ道」に傾倒してその跡をたどるものがあり、俳人以外の紀行でもごく稀に書名をあげるものもあるが、益軒や南谿に比べれば比較にもならない。俳諧の世界ではともかく、紀行作家たちの中では、芭蕉の影響は皆無に近く、彼やその作品と関係ない場所、近世紀行を生み育てる営みは行われていた。鳴神克巳が、「明治以降の新鮮な紀行文藝」というなら、江戸時代にもそのような、江戸時代の旅と旅人の現実を、より生き生きと描き出し、多くの読者に愛された「新鮮な紀行文藝」は模索され、誕生し、発展し、完成していた。それは芭蕉や「おくのほそ道」とは関わりなく伸び広がった道であり、流れであり、それは自然に明治以降の紀行にひきつがれたのである。

（板坂輝子『江戸の紀行文』より）

問七 空欄 A に入る語として、最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 天才	2 無理	3 失敗	4 限界	5 孤独
------	------	------	------	------

問八 空欄 B に入る語として、最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 名作	2 最高峰	3 失敗作	4 変わり種	5 新機軸
------	-------	-------	--------	-------

問九 傍線部 C 「上田秋成」の作品を、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 保元物語	2 椿説弓張月	3 春雨物語	4 栄花物語	5 折たく柴の記
--------	---------	--------	--------	----------

問十 空欄 D に入る語として、最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 偏痴氣論	2 深層心理	3 遊戯気分	4 変身願望	5 仮想現実
--------	--------	--------	--------	--------

問十一 傍線部E「宗祇」に関わるジャンルとして、最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 俳句
- 2 能楽
- 3 今様
- 4 催馬楽
- 5 連歌

問十二 傍線部F「ね」の文法的意味と同じものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 さてこの日和は能く続く事でござりますね
- 2 八重むぐらしげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり
- 3 恋ひ死ぬとするわざならしむばたまの夜はすがらに夢に見えつつ
- 4 朝髪の思ひ乱れてかくばかり汝ねが恋ふれぞ夢に見えける
- 5 君もいささかねいり給へばそのさまとも見ぬ人来て

問十三 空欄Gに入る語として、最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 さらさら
- 2 いやいや
- 3 こはこは
- 4 あらあら
- 5 ゆめゆめ

問十四 傍線部H「物語の枠にこだわって現実を生きる作業」を説明している文として、最も適切なものを、次の1～

- 1 現実を意図する憧れの側にねじ伏せること
- 2 ありのままの現実を受け入れようとする事
- 3 先の見えない日常を物語のように構築すること
- 4 悲壮な現実に対してつとめて明るくふるまうこと
- 5 全体のトーンを持続させて実社会をやり過ごすこと

問十五 段落1～10の内一つには、本文の趣旨にふさわしくない一文が挿入してある。それはどの段落か。その段落を示す記号1～10の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

問十六 空欄Iに入る語として、最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 代表作
- 2 批評
- 3 傑作
- 4 失敗作
- 5 偽物

問十七 本文の内容と一致しないものを、次の1～5の中から二つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 芭蕉は、江戸時代を中世的な緊張感と悲壮感のある時代と考えようとした。
- 2 『おくのほそ道』を楽しい旅の文学として教える傾向が一部にはあるようだ。
- 3 江戸時代の紀行文は、芭蕉の影響のないところで発展し、明治時代に継承された。
- 4 芭蕉の紀行文は、同時代作品が追いつくことのできない、孤高の名作である。
- 5 上田秋成は作中の人物の口を借りて、芭蕉の旅にのぞむ態度を罵倒した。

問十八 傍線部①「堯年鼓腹」は、「十八史略」の以下の逸話にもとづく言葉である。以下の漢文を読んで問いに答えよ。(返り点を省略した部分がある。)

帝堯陶唐氏、(略)帝嚳子也。其仁如天、其知如神。就之如日、望之如雲。都平陽。茆茨不剪、土階三等。(略)治天下五十年。不知天下治歟、不治歟、億兆願戴己歟、不願戴己歟。問左右、不知。問外朝、不知。問在野、不知。乃微服游於康衢。聞童謡曰、「立我烝民、莫匪爾極。不識不知、順帝之則」。有老人、含哺鼓腹、擊壤而歌曰、「日出而作、日入而息。擊井而飲、耕田而食。帝力何有於我哉」。

(一) 傍線部 a 「治」と共通の主語をもつ動詞を、b～fの中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

(二) 傍線部②「乃微服游於康衢」の読み下しとして、正しいものを次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- 1 乃れ微かに康衢にて服游す
- 2 乃微服にて康衢を遊ぶ
- 3 乃ち微服して康衢に遊ぶ
- 4 乃れ微して服游に衢を康す
- 5 乃ち微かに康衢を服游す

(三) 堯と並び称される名君を、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

- | | | | | |
|-----|------|-----|-----|------|
| 1 明 | 2 蘇武 | 3 舜 | 4 呉 | 5 孔明 |
|-----|------|-----|-----|------|

〔以下余白〕